様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１７２４９

研究課題名（和文）「集団」状況の知覚が個人の認知・判断変容に及ぼす影響－リスク・物質・表情認知－

研究課題名（英文）The Impact of group situation on perceptions and risk judgement

研究代表者
阿形　亜子（Agata, Ako）

奈良女子大学・大学院人間文化研究科・博士研究員

研究者番号：８０６３７１４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：周囲に人種などが同じ他者がいる課題状況は、動機づけやパフォーマンスを変化させることが先行研究によって明らかにされている。本研究の目的は、周囲に他者がいるという集団状況が、リスクテイク判断や、物質量の認知、表情認知に及ぼす影響を調べるものである。研究の結果、周囲に他者がいるのみの集団状況や、ともにチームで課題をおこなうような相互作用のある集団の影響よりも、個人に自己と深く関わるような（親密な）他者がいるかどうかが、リスクテイク判断に影響することが明らかとなった。親密な他者との関わりがある人ほど、利益を獲得するためにチャレンジするような場面で、よりリスキーな判断をしやすいことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、親密な対人関係が報酬獲得に関する判断に影響を及ぼすことが明らかとなった。この結果は、日常の対人関係の重要さを喚起する知見であると考えている。また本研究によって、先行研究で示されていた、人種などの同じ特徴を持つ他者と作業をすると動機づけやパフォーマンスが高まるといったMere belonging の背景には、日常の親密な人間関係があることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：Previous research has shown that group settings affect how much people make effort and better performance. This study aimed to elucidate the effect of group settings on individual judgement about risk-taking, and cognition of materials and face. The main result is that while group situations did not have strong effects, the degree of closeness to particular person affected individual risk-taking judgement. People have particular close person make riskier decision in reward related situations not in cost related situations.

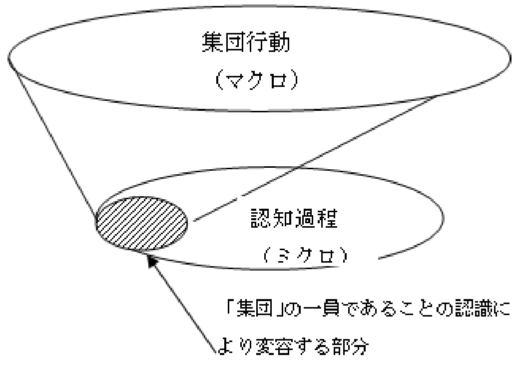
研究分野：社会心理学

キーワード：集団　リスク判断　認知　親密な関係

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

社会現象を捉える際，個人単位の心理（ミクロレベル）と集団単位の社会現象（マクロレベル）をつなぐ解釈の重要性はこれまで何度も主張されてきた（e.g.,亀田・村田, 2000; Hogg, 1992)。しかしながら，その枠組みを提供する研究知見はあまりにも少ない。本研究はこの問題を解決するために，集団の一員であるとの知覚が個人の認知・判断過程に及ぼす影響を検討することを目的とする。

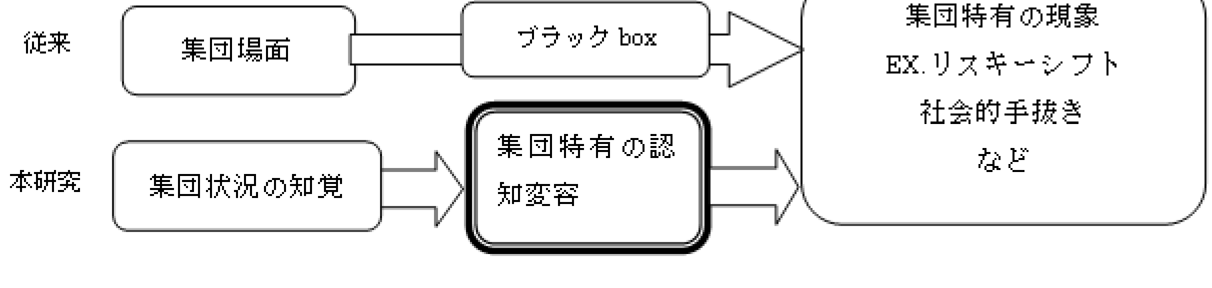


古くから、集団の存在は個人の行動に影響を及ぼすことが知られている。代表的な例としては集団作業では動機づけが個人作業よりも低下するという社会的手抜きがある。さらにここ 20 年ほどの比較的新しい研究では、集団でのポジティブな効果についての知見も提出されている。人種や社会階層が同じ他者と取り組んでいる課題状況は、モチベーションやパフォーマンスを向上させる（Mere belonging)。また、集団の一員として共に作業する他者の能力が低いときにはよりモチベーションが高まることも知られている（社会的補償)。しかしながら、それらの検討はパフォーマンスや動機づけなどの作業場面に限られており、集団状況が、個人の認知や判断に及ぼす検討はあまりされてこなかった。

これまで、集団で生じる行動の内部にある認知過程は軽視されてきたといえる。所属集団の社会的アイデンティティが脅かされることは心情の推測に影響するという。また集団の存在は、個人に対する評価懸念の低下や覚醒水準の低下のように、安心感をもたらす。これらは周囲の状況の知覚が認知・判断に与える影響を示しているといえるだろう。一生物としてヒトを捉えると、集団の存在は不可欠なものであり、無意識に感情や認知の変容が生じることは生物学的基盤もっても妥当といえる。このように、「集団」という状況の知覚は、個人の外界に対する状況認知や判断を変容しうると予測される。感情や認知を媒介し、モチベーションやパフォーマンスが生起するとの心理プロセスを考慮すれば、集団が判断や認知へ影響することも十分に考えられる。

２．研究の目的

本研究の目的は、周囲に他者がいるという集団状況が、リスクテイク判断や、物質量の認知、表情認知に及ぼす影響を調べるものであった。集団の影響力の主なものとして集団極性化がある。集団状況では、人は極端な思考・判断に陥りやすく、誤った判断をする傾向にあるといわれている。これまで集団極性化の主な原因として、社会的比較理論に基づいた解釈がなされていた。集団メンバーの意見と自らの意見を比較し、より極端な意見を述べて主張しようという動機が高まることや、集団内での意見交換によってより極端な意見に接するうちに自身の当初からの意見に、さらに自信を持つようになる、といったことである。これらは集団における影響過程ではあるものの、集団メンバー間の相互作用のみに基づいて解釈されており、感情や認知のプロセスは考慮されていない。そこで本研究では、周囲に他者がいる集団状況での個人のリスクテイク判断を中心として検討した。また、物質量の認知については、Mere belonging のような他者存在がモチベーションやパフォーマンスを高める効果が、心理的負担の軽減から生じているのかを検証することを目的とした。また表情認知に関しては、先行研究では既存の所属集団をプライミング（ステレオタイプに関わる想起）することで、対立集団カテゴリーの人物の表情認知が変化することが知られている。このため、実験場面においての一時的集団でも同様の結果がみられるのか否かを検討した。



３．研究の方法

集団場面を設定した実験状況で、リスクテイク判断・物質量の認知・表情認知について、個人条件との比較をおこなった。

(1)即時集団を用いた実験室実験の手続き

従属変数の測定の前に集団作業に取り組んでもらい、即時の集団の影響を検討することを目的とした。

実験条件：個人条件・高アイデンティティ集団条件・ニュートラル集団条件

集団状況では、4~5 名で 1 集団とし、実験に参加してもらった。初めに集団全体で関西への観光客の数を増やすにはどうしたらいいか、というブレインストーミング課題をおこなってもらった。高アイデンティティ集団条件では、実験参加者に大学名の入ったおそろいのパーカーを着用してもらい、対面で話し合いをおこなってもらった。ニュートラル集団条件では、実験参加者は各自同一の部屋にいるものの、話し合いはせずに、自身の意見は用紙に記入し、1 人ずつ順番に自分の意見を述べるという形をとった。個人条件では、単独で観光に関するアイデアについて案を出し、用紙に記入してもらった。この後、リスクテイキング課題では、シナリオを読みリスクテイク判断について回答してもらった。物質量の認知に関しては実験刺激の錘の重さの推定を、表情認知では人の表情について回答をしてもらった。

リスク認知に関するシナリオは次のようなものであった。自己の損失に関するくじの選択(当たる確率が高いが罰金額が少ない保守的な選択肢から，当たる確率は低いが罰金額が高いリスキーな選択肢まで，傾斜をつけて 10 パターン設定）および、自己の報酬獲得に関するくじの選択（当たる確率が高いが賞金額が少ない保守的な選択肢から，当たる確率は低いが賞金額が高いリスキーな選択肢まで，傾斜をつけて 10 パターン設定）をおこなう。

また参加者には最後に集団凝集性について評定をおこなってもらった。

(2)既存集団を用いた実験手続き

半日をかけて仮想世界ゲーム（広瀬, 1997）に 2 集団に分かれて取り組んでもらった後、(1)の手続きと同様の各回答項目に記入してもらった。この実験では、実験室実験で形成された即時の集団ではなく、普段から相互作用している人たちの中で、さらに競争的な集団課題に取り組んでもらうという手続きをとり、競争状況の影響を検討した。

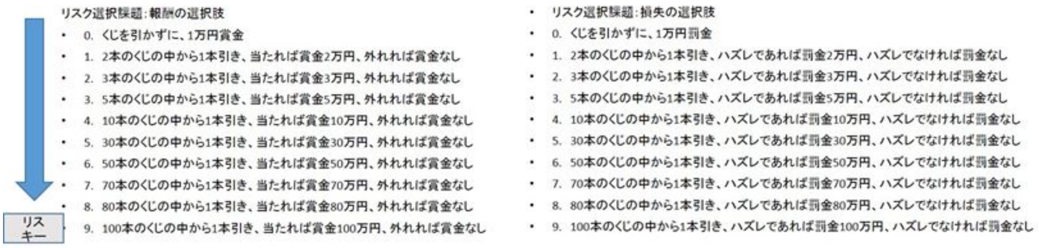
(3)親密な他者との関わりに関する実験手続き

Mere belonging の研究では、人種や社会階層といった参加者の日常に深いかかわりのある集団が設定されていた。これにより、集団というカテゴリーというよりはむしろ、当該所属集団と自己との関わりの強さが重要であると示唆される。ボウルビィの愛着理論によれば、人が発達していく段階では愛着対象とのつながりの形成が重要であるという。これらの愛着の形成は青年後も恋愛スタイルに影響を及ぼすともいわれている。人種や社会階層のモチベーションへの促進効果も、belonging（所属）というよりは bonding（自己との心理的繋がり）がその背景にあると考えられた。そこで、実験室での即時集団の影響に加えて、参加者にとって親密な他者と自己との関わりの深さを独立変数とした検討をおこなった。親密な他者との関係に対する測定には、The Inclusion of Other in the Self scale (IOS)（Aron, Aron & Smollan, 1992)を用いた。

４．研究成果

リスクテイク判断、表情認知と物質認知については即時で形成された実験場面での集団の効果はみられなかった。しかしながら、リスク判断について、自己に深く関わる他者の影響が個人のリスクテイク判断に影響を及ぼすことが示された。さらに、その影響は報酬に関する判断課題と､損失に関する判断課題で異なることが明らかとなった。相関分析をおこなったところ、IOS において親密な特定の他者とのかかわりが自己と深い人ほど、報酬獲得に関するリスク判断について、よりリスキーな選択肢をとることが明らかとなった。シナリオは次の通りであった。「いま、あなたはクイズ大会で優勝し、賞金を懸けたくじ引きを引く権利を得ました。くじ引きには数種類あり、あなたが好きなものを選択することができます。そして、今回は「くじを引かない」という選択をしても、1 万円の賞金を手にすることができます。なお、アタリくじはどのくじ引きにも 1 本しかなく、ハズレくじを引いた場合、賞金はもらえません」。選択肢は、期待値を一定にし、賞金金額が 10 通り設定されていた。

しかしながら、このような効果は報酬獲得のリスク判断においてのみであり、損失の可能性がある状況については、IOS の影響はみられなかった。損失に関する判断課題のシナリオは次のとおりであった。「いま、あなたはクイズ大会で最下位となってしまいました。
その罰ゲームとして、罰金を決定するくじ引きを引くか否かの選択を迫られています。
くじ引きには数種類あり、あなたが好きなものを選択することができます。そして、今回はくじを引かないという選択もできます。ただし、その場合もれなく 1 万円の罰金が科せられてしまいます。なお、ハズレくじはどのくじ引きにも 1 本しかなく、ハズレを引かなければ、罰金



が科せられることはありません」。

　このように、損失に関しては影響がみられず、報酬に関してのみ親密な他者と自己との関わりの効果がみられたのは、人は本来獲得よりも損失について敏感であり、より損失に関して重み付けが強いというネガティブインパクトのためだと考えられる。これらの研究成果により、人は損失に関しては一様に反応するものの、報酬獲得に関わる状況下では、親密な他者と自己とのかかわりが深い人は、よりリスキーな判断をすることが示された。

　当初予定されていた即時集団の影響はみられなかったものの、親密な関係が個人の判断に及ぼす効果の大きさを改めて再認識させる知見が得られた。今回の研究期間内では実際に長期的に相互作用があり自己のアイデンティティに深く関わるような集団は検討していないため、今後検討予定である。自己と他者の繋がりの深さのようなより情緒的・感情的側面が、集団状況におけるポジティブな効果の、予測因となることが示唆される。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計　5 件）

1. Agata, A. The effect of closeness about risk-taking decision on gain and loss. Annual Convention of the Society for Personality and Social Psychology, 2019
2. 阿形　亜子　親密な関係性のあり方とリスク選択傾向　作業療法神経科学研究会第 4 回学術集会, 2018
3. Agata, A. The effect of closeness about risk-taking decision on loss and gain. RIKEN CBS Summer program, 2018
4. 阿形　亜子・笠置　遊・安藤　香織　集団におけるリスク選択の変容　日本社会心理学会第 58 回大会, 2017
5. Agata, A., Ando, K. & Kugihara, N. The effect of independent and interdependent construal of self on motivation gain. Annual Convention of the Society for Personality and Social Psychology, 2017

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。